

放射線リスクコミュニケーション 相談員支援センターだより

「答えのない問い」に挑戦する
福島県立白河高等学校
教諭 大槻 涼太 様



福島県立白河高等学校（以下、白河高校）では、福島県「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の一環として、「震災復興しらかわゼミ」の活動に取り組んでいます。放射線に関する講義や東日本大震災・第一原発事故関連施設の見学を通して福島の現状について理解を深めるとともに、学んだことを他校との交流や発表会で発信する活動等も行っています。

本号では、「震災復興しらかわゼミ」の担当教諭である大槻涼太先生にお話を伺いました。

——震災復興しらかわゼミの活動目的を教えてください。

「震災と復興を未来へつむぐ高校生語り部事業」の目的として掲げられているように、福島における震災、復興、そして未来について自分の考えを持ち、自分の言葉で語ることをできる人物を育てることを目標としています。白河高校では、「震災の教訓を語る。地域

の魅力に気付く。輪を広げていく」をテーマとしており、2021年に前任の教諭が学年で活動を始めました。その後、私が引き継ぎ、現在では全学年を対象に実施しています。

——大槻先生が震災復興しらかわゼミに取り組むきっかけになったことはありますか。

東日本大震災及び第一原発事故当時、私は郡山市に住む中学3年生でした。郡山市は浜通りに比べて被害は少なく、復旧、復興も早かったこともあり、どこか他人事のように感じてしまっていました。しかし、高校卒業後に県外の大学に進学したことや令和元年東日本台風による水害を経験したことで、防災・震災教育に取り組みたいと考え、福島県の教員になりました。教員研修で訪れた東日本大震災・原子力災害伝承館では、初めて知ることも多く、これらの事実を生徒たちに伝え、東日本大震災、原子力災害からの復興をテーマに「答えのない問い」に対応する力を育みたいと思うようになりました。

——具体的にはどのような活動を行っていますか。

福島県立医科大学の坪倉正治先生や放射線リスクコミュニケーションセンターによる放射線に関する講義、東日本大震災・原子力災害伝承館や中間貯蔵施設等の見学を行っています。白河高校ならではの活動としては、2022年に小峰城の石垣修復に携わったことです。まずは地元の被害状況を知り、復興を学ぶという点で小峰城はとても良い題材でした。この活動をきっかけに熊本県との交流が生まれ、小峰城の石垣修復は熊本地震で被災した熊本城の石垣修復にも活かされました。



——これまでの取り組みのなかで、生徒たちに変化は見られましたか。

いずれの活動にしても、生徒たちは当時の状況を初めて知ることが多く、現地を訪れたことで復興はまだ終わっていないと実感している様子です。ゼミにはもともと震災や復興に関することに興味があった生徒もいますし、2年生になり、将来、医療関係や福島県内で活躍することを目指し、今後に役立つ内容として復興や放射線について学びたいと参加する生徒もいます。活動を通して一人一人が自分にできることを考え、震災や原発事故を自分事として捉えられるようになっていて感じています。将来は、建築関係や音楽の教員、公務員として様々な角度から震災、復興にアプローチしたいと考えているようです。

——活動を通して生徒たちに期待していることはどのようなことですか。

第一原発事故の教訓を福島県民の教養として身に付け、間接的でも直接的でも福島県のために自分にできることは何かを考え抜けるようになってほしいと考えています。また、語り部として語り、仲間の輪を広げていく過程で同じ仲間がいることを実感できれば素晴らしいことだと思います。

——大槻先生が伝えたいことはありますか。

学校の授業で学ぶことには答えがありますが、ゼミの活動には答えがありません。私は生徒たちとともに考え、ああでもないこうでもない話し合う時間が大好きです。ゼミでは私と生徒は教える・教わる立場ではなく、一緒に学び、考えることができる対等な関係であると感じています。時に生徒から気づきを得ることも少なくありません。生徒たちには今後も答えのない問いに挑戦することで自信をつけてほしいと思います。

——教員と生徒の垣根を超えた“一緒に学ぶ”というスタイルが、生徒自身の自発性につながっていることが分かりました。本日はありがとうございました。

住民セミナー、車座意見交換会の例

福島県立白河高等学校 放射線教育

本号のインタビューにお答えいただいた白河高校 大槻先生が担当する震災復興しらかわゼミについて、放射線リスクセンターが実施した今年度の住民セミナーと車座意見交換会について紹介します。

住民セミナーでは、講義、実習と施設見学を行いました。はじめに放射線の知識を身に付けるため、原子力安全研究協会の松原昌平先生が講師を務め、放射線の基礎知識等について学びました。また、放射線の特性を理解するため、測定実習を行いました。次に、白河高校に令和5年度より導入された保健・医療コースの生徒を中心に、福島県立医科大学の坪倉正治先生を講師に迎え、放射線の健康影響や原発事故後の健康課題について講義を行いました。

講義後のグループワークでは、「放射線は使い方次第では医療でも使えることができ、知識を身に付ければ正しい情報を伝えることができることが分かった」等の感想がありました。施設見学では、第一原発の見学を行いました。多くの生徒が参加し、施設担当者に熱心に質問する様子が見られました。



車座意見交換会では、除去土壌の県外最終処分や再生利用について考えるため、中間貯蔵施設と飯舘村長泥地区の見学を行いました。見学後には、前飯舘村長の菅野典雄氏から震災当時の話を聞く機会も設けました。意見交換では、「実際に参加して見ることで良かった。今日知ったことや感じたことを友人や家

族に伝えて、少しでも興味を持ってもらえたらと思う」等の意見がありました。



白河高校では、この他にも震災と復興に関する活動を積極的に実施しており、現在は1年間のまとめとしてポスター発表の準備をしているということです。今回のセミナー等で学んだことを今後の学習や将来に生かしていただければと思います。

複数市町村意見交換会

第8回相談員合同ワークショップ

令和6年11月28日、檜葉町のJヴィレッジにて、第一原発事故の発生当時、避難指示等が出された12市町村及び中核市の放射線相談員、生活支援相談員、自治体職員、移住定住支援センター職員等を対象として、第8回相談員合同ワークショップを開催しました。今回は、各自治体の復興フェーズの変化、昨今の情報発信手段の多様化という観点から、効果的な情報発信の事例や課題を共有することを目的として、午前の情報提供と午後のグループディスカッションの2部構成で実施しました。

はじめに、3名の発表者より情報提供を行いました。一般社団法人とみおかプラスの竹原愛梨氏より、「人と町をつなぐ情報発信」をテーマに、ターゲットごとのニーズに応じた情報発信について、次に、一般社団法人ならはみらいの松本祐子氏より、「檜葉町移住相談窓口」をテーマに、檜葉町を知り、訪れてもらい、移住に繋げるための情報発信等の取り組みについて、

最後に、川俣町原子力災害対策課の戸川謙一氏より、「放射線に関する情報提供」をテーマに、読んでもらえる広報誌の作り方について話がありました。



次に、内閣府原子力被災者生活支援チームより避難指示解除に向けた取り組みの現状について、環境省福島地方環境事務所より福島における環境再生事業の取り組みについて、それぞれ情報提供を行いました。

午後の部では、効果的であった情報発信の事例共有や課題に感じていることについて共有するため、グループディスカッションを行いました。



ジャーナリスト・環境カウンセラーの崎田裕子先生、福島大学の久保田彩乃先生、原子力安全研究協会の山田孝一先生をファシリテーターに迎え、3つのグループに分かれて行った意見交換では、「放射線に対し不安を抱いていても言い出せない隠れ不安の問題がある。住民へ積極的に声掛けする等、相談員の抵抗をなくす（発信者として信頼を得る）ことが重要である」、「中学生や高校生に説明をする場では、健康に影響が出る数値ではないと伝えても不安を持ってしまう生徒もあり、どのように伝えれば不安を抱かないようにで

きるかを意識している」、「相手（発信先）の顔が見えにくいこともあり、情報の発信方法や量、意味が適切か、情報が届いているか等、情報発信の成果が不明瞭のため不安である。情報を必要としている人が来た時に見逃さないためにもコミュニケーション力を高めることも大切である」等の意見がありました。

最後に、総評として、崎田裕子先生より、「情報発信の必要性について改めて考える良い機会となった。情報は出したい側の押しつけではなく、受け取る側の気持ちも考えることで、お互いが納得できる形になると考える」等の話がありました。

今回のワークショップでは、時間の経過とともに、リスクコミュニケーションのあり方が変化する中で、類似した悩みを共有、交流できる貴重な場であったという声が多く聞かれました。

住民セミナーの例

只見町立朝日小学校 放射線教育

令和6年12月4日、只見町立朝日小学校で放射線教育を行いました。講師に原子力安全研究協会の峯村明彦先生を迎え、低中高学年の2学年ごとに放射線教育を行いました。



低学年の授業では、紙芝居で東日本大震災の発生や第一原発で事故が起きたこと、放射線は量が多すぎると危ないことや普段から身の回りにあること、病院のレントゲン検査や身近なところで放射線が利用されていること等を学びました。その後、霧箱で放射線の飛

跡を観察し、最後に授業で学習した内容の復習クイズを行いました。

中学年、高学年の授業では、講義で放射線は量が多すぎると危ないということ、人から人へうつらないこと、放射線は目には見えないが機械を使い測ることができること等を学習しました。その後、グループに分かれて校舎内の空間線量率測定を行い、放射線がどこにでもあることを学びました。



児童の皆さんは、先生の講義にしっかりと耳を傾け、積極的に実習に取り組む様子が見られました。各授業の最後に、児童の皆さんが発表してくれた感想の中には「霧箱で放射線の通った跡が見ることができてよかった」、「放射線の量を確認できて良かった」等の声がありました。

この日の授業をきっかけに、児童の皆さんが少しでも放射線について関心を持ち、正しい知識を身に付けてもらうことができれば嬉しく思います。



放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターだより No.43

発行：放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター

連絡先：〒970-8026 いわき市平字小太郎町1-6

いわきセンタービル5階

フリーダイヤル：0120-478-100

FAX：0246-35-5158

E-mail：F-sodan@nsra.or.jp

